「詞書」からわかること

若林俊英

一-一　詞書とは

古典文学、特に和歌文学に興味を持っている人を除き、「詞書」や「左注」とはどのようなものか、正確にわかる人はあまり多くはないようである。

『古今和歌集』春歌上に有名な在原元方の

ふるとしに春たちける日よめる……①　在原元方……②

年の内に春はきにけりひととせをこぞとやいはんことしとやいはん（一）……③

という和歌があるが、このうちの①の部分を詞書と呼ぶ。また、同じく『古今和歌集』春歌上七番歌の

題しらず……①　読人しらず……②

心ざしふかくそめてしおりければきえあへぬ雪の花とみゆらむ（七）……③

ある人のいはく、さきのおほきおほいまうちぎみの歌也……④

のような場合の④は左注と呼ぶ。

和歌は、このような要素からできているが、当然のことながら③は必須で、①・②・④に関しては、あったりなかったりする。

ここで、「詞書」「左注」は、どのように定義されているのかをみたい。『和歌大辞典』（一九八六）では、

「詞書」　題詞とも。和歌の前にあって、その歌の作歌事情・季節・詠んだ場所などを散文で説明したもの。…

「左注」　和歌の後にあって、散文でその歌についての補足説明をしたもの。和歌の歌詞についての異伝、詠歌事情に関する異聞、作者についての一説などを説明したものが、ほとんどである。…

のように定義されている。なお、本稿では、「詞書」と「左注」を一括して「詞書」（「」で括る）として数値等を利用する。

では、「詞書」は、どのような役割をするのであろうか。たとえ

ば、『古今和歌集』秋歌上一八三番歌に

今日よりはいま来む年の昨日をぞいつしかとのみ待ちわたるべき（一八三）

とあるが、「詞書」がないと、この「昨日」というのがいつのことか、必ずしも明確ではない。しかし、この和歌に付された「八日の日よめる」とある「詞書」、およびこの歌の部立てが「秋歌上」であることによって、「昨日」が七月七日であることがわかる。それにより受け手が明確に意味を捉え、詩的世界にひたることができるようになるのである。もちろん、明確に規定しないことによって詩的世界が広がる場合があることも否定しない。ただ、現代と同じように、明確でないもの、曖昧なものの魅力は、勅撰集ができた当時の人々にもわからなかったのかもしれない。

一-二　詞書の改変

次に、ある和歌について、勅撰集に載せられる前と載せられた形について、一例をみることにする。

『寛平御時后宮歌合』一〇一には、

右　　大江千里

うゑしとき花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはんとやみし

とあり、『寛平御時菊合』八には、

きのくにのふきあげのはいくはまのきく　　菅丞相

あきかぜのふきあげにたてるしらぎくははなかあらぬかなみのよするか

とあるのが、『古今和歌集』秋下二七一に、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　大江千里

うへし時花まちどをにありしきくうつろふ秋にあはむとやみし

とあり、『古今和歌集』秋下二七二

おなじ御時せられける菊合に、すはまをつくりてきくの花うへたりけるにくはへたりける歌、ふきあげのはまのかたにきくうへたりけるをよめる　　すがはらの朝臣

秋風のふきあげにたてるしらぎくは花かあらぬか浪のよするかのように連続して撰歌されている。この両歌を連続させるに当たり、「おなじ御時せられける菊合に」のような文言を入れると同時に、「詞書」を大幅に増補していることがわかる。

一-三　『後撰和歌集』の「詞書」と『兼輔集』の「詞書」

次に、『後撰和歌集』の「詞書」についてふれたいと思う。なお、ここで比較する歌集を『兼輔集』に限った点について、一言ふれておく。

勅撰集を撰歌するに当たっては、当然、撰歌資料が必要である。後の勅撰集においては、応制百首[1]と呼ばれる、勅撰集の撰歌を目的にした百首歌も作られているが、早い時代においては、主として私家集や歌合が撰歌資料となっている。ただ、現存する私家集は、勅

撰集をもとにして編んだ他撰のものも多く、確実に自撰と思われるものは数えるほどしかない。ここで挙げた『兼輔集』[2]は自撰である可能性があり、また、他撰である場合も、その成立が比較する『後撰和歌集』の成立以前と考えられるので、これを使用した。なお、和歌部分は省略した。

『兼輔集』四には、

兵衛のつかさはなれてのちにまへにこうばいをうゑて、花のおそくさきければ

とあるが、『後撰和歌集』春上一七では、

前栽に紅梅をうへて、又の春遅く咲きければ

のようになっている。また、

『兼輔集』一九には、

庭にたたずみて八重やまぶきのもとにて

とあるが、『後撰和歌集』春下一〇八では、

前栽に山吹ある所にて

のようになっている。また、

『兼輔集』七九には、

女のもとよりいでてほどもなくゆきのいたうふりければ

とあるが、『後撰和歌集』一〇七〇では、

女の、怨むることありて親のもとにまかり渡て侍けるに、雪の深く降りて侍ければ、朝に女の迎へに車つかはしける消息に加へてつかはしける

のようになっている。

『兼輔集』一二七には、

このかなしきなど人のいふところにて

とあるが、『後撰和歌集』一一〇二では、

太政大臣の、左大将にて、相撲の還饗し侍ける日、中将にてまかりて、事終りて、これかれまかりあかれけるに、やむごとなき人二三人許とゞめて、客人、主、酒あまたゝびの後、酔にのりて、子どもの上など申けるついでに

のようになってる。

これらをみると、一〇七〇番歌や一一〇二番歌では詠歌の事情が非常に具体的になっていることがわかるであろう。

「詞書」は、勅撰集に採歌され、編纂される段階で簡略に、また、より具体的に改変される。このような操作は、言うまでもなく編者が行ってる。この点からすると、「詞書」は対象となった和歌に対する編者の解釈を示していると言ってもよい。ということは、各勅撰集の「詞書」の語彙を比較することによって、各勅撰集の編者の意識の差を読み取ることができるのではないか、という考えのもとに、筆者は勅撰集の「詞書」の語彙をみてきた。

一-四　「詞書」の語彙の一般的傾向

そもそも筆者が「詞書」に目をつけたのは、和歌などの韻文、日記・物語などの散文とは違った性格の文・文章があるのではないか

という、素朴な疑問を持ったからである。たとえば、『建礼門院右京大夫集』という作品があるが、これは、私家集なのか日記なのかはっきりしない。また、『篁物語』『小野篁集』『篁日記』と言われる作品がある。これは歌物語とされているが、語彙方面からみるとどうなるのか。このような点を国語学（語彙史）の面から解明するための指標となるものを「詞書」の語彙を利用して考えようというのが、出発点であった。しかし、まだ「詞書」の語彙から抜け出すことができていないのが現状である。ただ、「詞書」の語彙は散文の語彙と比較した場合、

（1）名詞の品詞別構成比率は散文と比較すると高い。
（2）動詞の品詞別構成比率は散文と比較すると低い。
（3）形容語（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）の品詞別構成比率は散文と比較すると低い。

のような特徴があることはわかった。これは、「詞書」の一般的傾向としてのものであるが、各勅撰集の「詞書」にはその「詞書」特有の性格もみてとれる。以下、三代集と二条家三代集について、各歌集の「詞書」の語彙の特色の一端、および三代集と一括した場合の「詞書」の語彙と、二条家三代集と一括した場合の「詞書」の語彙との比較等について、いささかふれる。

一－五　三代集と二条家三代集

三代集とは、藤原俊成の『古来風体抄（初撰本）』佐佐木（一九七二）にある

たゞかみ萬葉しふよりはじめて、中古々今、後撰、拾遺、しも後拾遺よりこなたざまのうたのときよりうつりゆくにしたがひて、すがたもことばもあらたまりゆくありさまを、…このゝち華山の法皇拾遺集をえらばせたまひて、古今、後撰ふたつのしふにのこれる歌をひろへるよしにて、拾遺集と名づけられたるなり。よりて古今、後撰、拾遺、これを三代集と申なり

という言を引くまでもなく、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』を指す。また、二条家三代集とは、御子左家と呼ばれる歌の家の人々、具体的に言うと、俊成、定家、為家が単独で撰した『千載和歌集』『新勅撰和歌集』『続後撰和歌集』の三勅撰集のことである。この二条家三代集の選び方について疑問を持たれるむきもあろうかと思われる。中世を代表する第八勅撰集の『新古今和歌集』が入らず、第七勅撰集の『千載和歌集』、第九勅撰集の『新勅撰和歌集』、第一〇勅撰集の『続後撰和歌集』で二条家三代集が構成されているからである。耳慣れない『続後撰和歌集』が二条家三代集に入っているのはなぜか。これは、各勅撰集の撰者に関係がある。『新古今和歌集』の撰者は、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経・寂蓮（中途で没）である。『新古今和歌集』は、定家が撰者の一人として入っているものの、他の家系の人も入っている。御子左家（二条派）の人々にとって、極論すれば、『新古今和

歌集』には、不純な和歌が紛れ込んでいると考えても無理はなかろうと思う。それに対して二条家三代集の撰者は、先に述べたように、御子左家の俊成・定家・為家である。なお、二条家三代集を構成する三勅撰集の中で、後世への影響という点からみると、『続後撰和歌集』が最も大きい[3]と考えられる。

一-六　「語彙」の定義

これまで「語彙」という術語を無造作に使ってきた。以下、具体的に「詞書」の語彙についてふれるので、その他の術語とともに、ここで定義したいと思う。

「語彙」…ある範囲（たとえば時代・作品・ジャンルなど）に使われた語の総量。

「異なり語数」…同じ語が何回出てきても、一語にしか数えない単語の数え方。

「延べ語数」…同じ語が何回出てきても、そのたびに一語として数える単語の数え方。

「平均使用度数」…延べ語数を異なり語数で割ったもの。

以上のように定義できると思うが、以下、この定義をもとにし、三代集の方から順次みたいと思う。

二-一　三代集の「詞書」

まず、『古今和歌集』の「詞書」の語彙からみたいと思う。なお、以下、『古今和歌集』の「詞書」については、「古今詞書」のように略称し、他の和歌集の「詞書」についても同様に略称する。なお、三代集を構成する「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」を一括してみる場合は「三代集詞書」と、二条家三代集を構成する「千載詞書」「新勅撰詞書」「続後撰詞書」を一括してみる場合は「二条家詞書」と略称する。

二-一-一　「古今詞書」

『古今和歌集』、これは『新続古今和歌集』（永享一〇年・一四三八、四季の部奏覧）までの二一代の勅撰集の最初のものであり、第二勅撰集である『後撰和歌集』以降の勅撰集の手本となっているものである。部立てを含め、編纂方法等、後の勅撰集に大きな影響を与えている。

一-四でみた散文の語彙と比較した場合の「詞書」の語彙の一般的特徴について、「古今詞書」を例にとると、「古今詞書」の異なり語数での比率は名詞は六八・一パーセント、動詞の比率は二四・七パーセント、形容語（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）の比率は六・七パーセントとなる。なお、宮島達夫ほか編『日本古典対照分類語彙表』（二〇一六　笠間書院）に載る一七作品でのそれをみると、異なり語数での名詞の比率の最も高い作品は『平家物語』の七四・九パーセント、次いで『大鏡』の六三・九パーセント、動詞の比率の最も低い作品は『平家物語』の一九・四パーセント、次い

表（1）

	古今	後撰	拾遺	千載	新勅撰	続後撰
異なり比率	6.7	9.1	5.3	6.0	4.7	4.0
延べ比率	5.5	8.0	3.9	3.4	2.2	2.9

で『大鏡』の二五・八パーセントであることがわかる。また、形容語の比率の最も低い作品は『平家物語』の五・三パーセント、次いで『万葉集』の七・六パーセントである。

このような数値からして、「古今詞書」（他の「詞書」も）の語彙の品詞別構成比率は軍記物である『平家物語』や歴史物語である『大鏡』における品詞別構成比率と相対的に類似し、中古の一般的な散文とは異なった品詞別構成比率をとっていることがわる。

二-一-二　「後撰詞書」

次に、『後撰和歌集』についてみたいと思う。この『後撰和歌集』には、『古今和歌集』と大きく相違している点がある。それは、ここでふれる「詞書」の物語的傾向（散文的傾向）の強さということである。

表（1）は、三代集および二条家三代集と称される各勅撰集の「詞書」における形容語の異なり語数・延べ語数での比率をまとめたものである。また、表（2）は、『伊勢物語』『土左日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』における形容語の異なり語数、延べ語数での比率をまとめたものである。

この表（1）および表（2）をみると、表（2）の

表（2）

	伊勢	土左	蜻蛉	枕	源氏	紫
異なり比率	13.1	13.8	14.3	11.4	12.5	15.1
延べ比率	13.6	15.3	20.6	22.9	25.1	19.2

散文に比べて表（1）の「詞書」における形容語の比率の低さが注目に値するものとなっている。

『国語学大辞典』（一九八〇）では「詞書」について、

和歌・俳句などの作者・制作の動機・日時・場所・場面・対象・目的、その他前後の事情等について記し、また作品の主題・内容等について説明を加えたもの

としている。この説明からすると「詞書」には名詞が多用されることがわかる。このような「詞書」の性格からして、形容語の使用が少ないことは当然予想されるが、表（1）、表（2）からは極端に少ないことがわかる。ただ、このような「詞書」の中では「後撰詞書」における形容語の相対的な多さが目につくであろう。これは、事物の性質や状態、感情・感覚などの表現が「後撰詞書」に多用されていることを表している。つまり、他の「詞書」よりも物語的傾向、散文的傾向が強いということの証左となり得る。

二-一-三　「拾遺詞書」

次に『拾遺和歌集』についてふれたいと思う。

『拾遺和歌集』に関して、『和歌大辞典』（一九八六）では、

古今集で培われた和歌観や史観を、さらに進展・深化させている側面を評価することができよう

としている。

表（3）は、「三代集詞書」を構成する三つの「詞書」の異なり語数・延べ語数、平均使用度数をまとめたものである。

この表（3）をみると、「拾遺詞書」は、平均使用度数においては、三代集で最小であることがわかる。一方、異なり語数では、「拾遺詞書」の方が「後撰詞書」よりも多いこともこの表（3）からはみてとれる。換言すれば「拾遺詞書」は、延べ語数の割に異なり語数が多く、バラエティーに富んでいるとも言える。なお、平均使用度数でみると、「拾遺詞書」は「古今詞書」をおおむね踏襲し、結果的に「三代集詞書」における「後撰詞書」の特異性を浮き彫りにしている。

なお、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』を三代集とし、第四勅撰集である『後拾遺和歌集』との間に歌風の転換点あるとするのが一般的な考え方であるが、これに対して西端幸雄（一九九四）は、

八代集を、語彙史の面から見ると、『拾遺集』に大きな転換点がある

表（3）

	異なり語数	延べ語数	平均使用度数
古今詞書	882	3,918	4.44
後撰詞書	1,276	7,003	5.49
拾遺詞書	1,287	5,203	4.04

とした。西端の指摘は和歌に関するものであるが、「詞書」も撰者の撰集意識が色濃く反映するものである以上、「語彙」にも転換点がみられるかもしれない。このような仮説のもと、水谷静夫（一九八二）が示した類似度D'[4]を計算すると、表（4）のようになることがわかる。

この表（4）からは「拾遺詞書」の語彙と「後拾遺詞書」の語彙との類似度D'が「後撰詞書」の語彙と「拾遺詞書」の語彙との類似度D'よりもわずかではあるが高いことがわかるであろう。また、「古今詞書」の語彙と「後撰詞書」の語彙との類似度D'が「後撰詞書」の語彙と「拾遺詞書」の語彙におけるそれより高いこともわかるであろう。なお、「後撰詞書」の語彙と「後拾遺詞書」の語彙との類似度D'が高いことは、「後拾遺詞書」の語彙の散文的性格からくるものと考えられる。

「詞書」の語彙の類似度D'の数値からすると『拾遺和歌集』は、無条件に三代集として一括りにはできない可能性があることがわかった。なお、この点については、一層の精査が必要なので、「可能性」としておく。

表（4）

	後拾遺詞書	拾遺詞書	後撰詞書
古今詞書	0.771	0.759	0.818
後撰詞書	0.825	0.797	
拾遺詞書	0.811		

二-二　二条家三代集の「詞書」

二-二-一　「千載詞書」

次に、二条家三代集についてふれる。

まず、第七勅撰集の『千載和歌集』についてみたいと思う。

『千載和歌集』は、『日本古典文学大事典』（一九九七）によると、

『後拾遺和歌集』以降顕著になったあらわな理知・趣向を尊ぶ傾向に対し、哀寂味を基調とする素直な主情性を重視する。…（略）…視覚的、聴覚的な感覚の冴えを見せる作品や、本歌取・物語取等新古今時代に開花する技法の先駆となる作品も少なくない

と言われるものである。これは、和歌部分に関する評であるが、「詞書」においても、三代集時代とは異なる傾向が見受けられる。

表（5）は、「三代集詞書」を構成する三つの「詞書」、および「千載詞書」「新古今詞書」における「こひ」「たび」という語の使用度数を示したものである。この数値から、和歌の題材の変化を読み取ることができる。と同時に、この二語は中世という時代によく使用された時代語的要素を持ったものであると言えそうである。

表（5）

	こ　ひ(恋)	た　び(旅)
古今詞書	0	1
後撰詞書	1	6
拾遺詞書	0	3
千載詞書	106	25
新古今詞書	68	26

二-二-二　「新勅撰詞書」

次に、『新勅撰詞書』についてふれたいと思う。

『新勅撰和歌集』は、『和歌大辞典』（一九八六）によると、

道家ら九条家、公経・実氏ら西園寺家の貴顕や、実朝ら幕府関係者、定家と私交のあった者などの歌を多く収め、集の定家的性格は顕著である

とされるものである。

以下、『和歌大辞典』（一九八六）で指摘された定家的性格が「新勅撰詞書」にみられるかどうかを具体的にみることにする。

表（6）は八代集の「詞書」および「新勅撰詞書」における「びやうぶ（屏風）」の使用度数をまとめたものである。この表（6）からすると、「新勅撰詞書」における「びやうぶ」の使用度数は、必ずしも特徴的なものであるとは言えない。以下、使用例をいくつか具体的にあげたいと思う。

例A　延喜七年三月、内の御屏風に、元日ゆきふれる日（三）

例B　寛喜元年十一月女御入内屏風、江山人家柳をよみ侍ける（二八）

例C　寛喜元年女御入内屏風、杜辺山井流水ある所

表（6）

	古　今	後　撰	拾　遺	後拾遺	金　葉	詞　花	千　載	新古今	新勅撰
びやうぶ(屏風)	9	1	132	33	2	7	4	33	25

（一八八）

例Ｄ　文治六年女御入内屏風に（六八）

のようなものがある。これらの用例からわかるように、「新勅撰詞書」における「びやうぶ」の頻用は、他の「詞書」の場合と同様、撰歌資料としての屏風歌の重視の結果であるということになると思う。ただ、「新勅撰詞書」における「びょうぶ」が使用された「詞書」をみていると、ある特徴に気づかされる。例Ｂや例Ｃのように、「寛喜元年入内屏風」歌に関する屏風歌であることの明示とともに、多くの場合、歌題（もしくはそれに類するもの）も示されているということである。この点、例Ｄにあげた「文治六年女御入内屏風」歌の場合と比較すると、その差は歴然としている。具体的に数を示すと、「寛喜」の場合、一一例中歌題がないもの二例、「文治」の場合、五例中歌題がないもの四例となっている（上掲以外の屏風歌の場合は、九例中歌題がないもの五例。なお、「寛喜」「文治」に関しては、あくまでもそれぞれの屏風歌であることを明示した「詞書」に関してのみ考察の対象とした）。

比較上、「新古今詞書」における「びやうぶ」の使用状況をみると、屏風歌に関係ない一例を除く三二例中一九例が屏風歌の明示のみの「詞書」での使用であることがわかる。また、「文治六年女御入内屏風」歌とする「詞書」で使用された六例中、歌題をも示すものは二例であることもわかる。

このような点からすると、『新勅撰和歌集』の撰集に当たって撰者定家は、自己の主家に当たる関白藤原道家の長女竴子の入内に関する『寛喜元年（十一月）女御入内屏風和歌』を撰歌資料として重視し、それからの入集歌には、他の場合以上に「詞書」にも注意を払ったと思われ、その結果として、他の屏風歌の場合よりも歌題を記載する「詞書」が増加したと考えられる。この点、定家的性格の一端と考えることも可能であると考える。

二-二-三　「続後撰詞書」

次に、『続後撰和歌集』についてみることにする。

『続後撰和歌集』について樋口芳麿麻呂は、『新編国歌大観　第一巻』（一九八三）の解説で、

当代賛頌の念が顕著で、温雅平淡な歌が多く、後世の二条派歌人から花実相応の集と評せられたものであるとした。

ここでは、「しやうぢ（正治）」という年号の使用状況をみたいと思う。

表（7）は、「新古今詞書」から「続後撰詞書」までに使用された「しやうぢ」の使用度数を示したものであるが、ここにある数値をみる場合、いささか注意を要するので、以下、少々説明を加える。

『正治百首』は、『新古今和歌集』の下命者後鳥羽上皇が主催したものである。したがって、『新古今和歌集』

表（7）

	新古今	新勅撰	続後撰
しやうぢ(正治)	0	1	12

の撰集に当たり、撰歌資料として重要視するのは当然のことと言える。事実、『新古今和歌集』には、『正治二年初度百首』から七九首、『正治二年第二度百首』から一〇首の、計八九首入集[5]している。しかし、その入集歌に関してはほとんど、

例E　百首歌たてまつりし時（一七）

例F　百首歌たてまつりし時、春の歌（三）

のように、「百首歌たてまつりし…」のような形式をとっている。勅撰集の下命者と、当該定数歌の主催者とが同一人物であることからして、このような「詞書」をつけたのであろうと考えられる。ところが、『新勅撰和歌集』においても重要な撰歌資料であった『正治百首』からの入集歌に、撰者定家が「しやうぢ」を一例しか使用しなかったのはなぜなのだろうか。その理由は、承久の乱の失敗により配流の身の上となった後鳥羽院の主催した『正治百首』であったからだと考えられる。後鳥羽院を連想させる『正治百首』は、いくら撰歌資料名であっても撰者定家を取りまく政治状況からして控えざるを得なかったのであろう。なお、久曽神昇・樋口芳麻呂（一九六一）によれば、『新勅撰和歌集』には『正治百首』から一七首採歌されている。

今井明（二〇〇〇）は、

為家は『新勅撰集』に示された定家の撰歌方針を崩すことなく、その枠組みのなかに後鳥羽院と定家の作を組み込んで行き、後鳥羽院・定家ふたりの組み合わせを中心に元久期の歌壇像を描き出そうとしたらしい

としている。為家は、政治的理由から定家がなし得なかった後鳥羽院歌重視の方針による撰歌を『続後撰和歌集』において行い、撰歌資料として重視した『正治百首』から採歌した和歌の「詞書」に「正治百首」と明示した結果、「しやうぢ」という語が頻用されたと考えられる。なお、『続後撰和歌集』の下命者後嵯峨院の父祖に当たる後鳥羽院の主催した『正治百首』の重視は、先に述べた定家の意思であるとともに、当代賛頌にもつながってくるものであると言える。

三-一　「三代集詞書」と「二条家詞書」

次に、三代集と二条家三代集の「詞書」の語彙について、いくつかの点から比較したい。

三-一-一　品詞別構成比率

表（8）は、「三代集詞書」および「二条家詞書」における異なり語数・延べ語数での品詞別構成比率をまとめたものである。

「二条家詞書」における比率は、「三代集詞書」と比較した場合、名詞の比率が高く、動詞の比率が低いことがみてとれる。また、形容語の比率をみると、「二条家詞書」におけるそれは、「三代集詞書」におけるそれの、七二パーセント（異なり語）、四八パーセント（延べ語）程度しか使用されておらず、その低さが目につく。ま

表（8）

		名詞	動詞	形容詞	形動	副詞	連体詞	その他	形容語
三代集詞書	異	68.6	24.1	3.0	1.4	2.0	0.2	0.6	6.7
	延	59.6	34.3	2.4	0.5	2.0	1.2	0.1	6.0
二条家詞書	異	75.3	17.6	2.3	1.0	1.4	0.2	2.3	4.8
	延	68.7	28.1	1.6	0.2	0.7	0.4	0.3	2.9

た、「二条家詞書」における名詞の比率の高さ、動詞の比率の低さは、「詞書」の編纂態度に関わっていると考えられる。つまり、「二条家詞書」は「三代集詞書」に比して、固定的、類型的な、「詞書」本来の性格をより強めたものとなっているということである。この点、先に述べた形容語の比率の低さということからも裏づけられると思う。

三-一-一-一　連体詞「ある（或）」

次に、形容語の中で、その使用が特徴的な連体詞の「ある（或）」についてふれたいと思う。

表（9）からは、「ある」は「三代集詞書」で五五例、「二条家詞書」で二例と、偏りがあることがわかるであろう。「三代集詞書」における使用例を具体的にみると、

例G　女のおやのおもひにて山でらに侍りけるを、ある人のとぶらひつかはせりければ、返り事によ

表（9）

	古　今	後　撰	拾　遺	千　載	新勅撰	続後撰
ある(或)	26	13	16	1	0	1

める（古今・八四四）

のような比較的長い「詞書」で使用されたもの、

例H　ある人のいはく、さきのおほきおほいまうちぎみの歌也（古今・七・左注）

のように左注で使用されたもの、また、詠者名を記さないものや「よみ人知らず」とするものが比較的多いことがわる。これに対して「二条家詞書」における使用例は、

例I　服に侍りける時、或る上人の来れりけるが、墨染の袈裟を忘れて取りに遣したる、遣すとて詠める（千載・五八〇）

のように比較的長い「詞書」において使用されていることがわかる。また、「続後撰詞書」における使用例も比較的長い「詞書」で使用されており、この点からすると、「三代集詞書」の場合と相違はない。ただ、用例数が二例と少ないので、確とは言えないが、左注での使用例がない点、二例とも詠者名が記された和歌の詞書で使用されている点で、「三代集詞書」と相違がみられる。二条家三代集は、「よみ人知らず」歌や詠者名を記さない和歌が少ないが、このような詠者名の匿名性の希薄化が、結果的に物事を漠然とさす「ある」の使用度数の減少につながったと思われる。

表（10）

	古今	後撰	拾遺	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今
かくる	3（3）	4（3）	3（1）	21（1）	17	11	6	12
うす	1	2（1）	4	0	4	0	0	2
みまかる	18	13	1	21	26	12	12	17
なくなる	2	7（1）	17	2	10	0	0	2

三-一-二　死を意味する表現

次に「死」を意味する表現についてみることにする。

表（10）は、「三代集」「二条家三代集」、および「新古今詞書」「続古今詞書」における「死」を意味する「かくる（隠）」「うす（失）」「みまかる（身罷）」「なくなる（亡）」についての使用度数を示したものである。なお、カッコ書きした数値は、うち「死」以外の意味の度数を示したものを示す。

この表（10）からは、「かくる」および「みまかる」の使用が非常に広範であることがわかる。また、「かくる」は「千載詞書」以降での頻用、「うす」や「なくなる」は「三代集詞書」および「新古今詞書」では使用されているものの、他の「詞書」においてはほとんど使用されない点もわかる。これらのことから、「三代集詞書」では「みまかる」「なくなる」が、「二条家詞書」では「みまかる」「かくる」が好まれていることがわかるであろう。

小久保崇明（二〇〇六）は、八代集における「死」に関する婉曲表現を考察し、「なくなる」→「うす」→「かくる」と、より婉曲度が高くなり、忌詞的性格が強いと結論づけている。この結論を踏まえると、「二条家詞書」には、忌詞的性格が強い「かくる」が、「三代集詞書」には、それが比較的弱い「なくなる」が好んで使用されていることになる。このような使用差は、撰集態度が反映された結果であるとみられる。このように考えると、定家が撰者の一人として加わった『新古今和歌集』の「詞書」には「二条家詞書」では一例も使用されていない「うす」が四例、「二条家詞書」ではほとんど使用されていない「なくなる」が一〇例使用されている点や、為家が、為家に批判的な藤原光俊（真観）らとともに撰した『続古今和歌集』の「詞書」に「うす」や「なくなる」が使用されている点も意味を持ってくる。つまり、『新古今和歌集』や『続古今和歌集』が二条家三代集の撰集方針を踏襲していない証左になると同時に、「二条家詞書」における「死」に関する表現は、「みまかる」とともに、より忌詞的性格の強い「かくる」を中心として使用するという編纂方針であった証左ともなるからである。

表（11）

	続後撰詞書	新勅撰詞書
千載詞書	0.828	0.829
新勅撰詞書	0.856	

三-一-三　「二条家詞書」の類似度'D'

表（11）は、二条家三代集を構成する各「詞書」における類似度'D'の数値を示したものである。

三代集を構成する各「詞書」における類似度'D'の

数値については、二-一-三の表（4）でみた。その数値と、ここで示した表（11）とを比較すると、二条家三代集を構成する各「詞書」の類似度'Dの値が、三代集の方のそれの値よりも高いことがわかると思う。これは、後の勅撰集に大きな影響を与えた『古今和歌集』に準じながらも、各勅撰集の編者が独自の編纂方針によって撰した三代集の「詞書」と、御子左家という歌の家の人々が撰し、編纂方針にも一貫性のある二条家三代集の「詞書」との差によるのであろうと考える。なお、この類似度'Dの数値の差は、三-一-一でもふれたが、二条家三代集を構成する各「詞書」が固定的、類型的な「詞書」となり、使用する用語も類似したものになった結果でもあると思う。

三-一-四　人物に関する表現

次に、人物に関する表現についてみたいと思う。

人物を表現する方法としては、具体的な人名による示し方と、ここでふれようとする、より抽象的な「ひと（人）」「をんな（女）」「をとこ（男）」、また官職名などによる示し方がある。

表（12）は、「三代集詞書」「二条家詞書」と『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『蜻蛉物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『更級日記』における「ひと（人）」「をんな（女）」「をとこ（男）」、官職（太政大臣・左大臣・右大臣・大納言に、正しくは官職名ではないが大臣[6]を加え代表させた）の使用度数と、作品別延べ語数、語別使用度数、総使用度数を期待値[7]および期待値を一とした場合の使用度数の比を示したものである。なお、『竹取物語』から『更級日記』における各語の使用度数および作品別延べ語数は宮島達夫ほか編『日本古典対照分類語彙表』（二〇一四）を用いた。また、語別使用度数および総使用度数については、上記『日本古典対照語彙分類表』に載る一七作品における数値に「三代集詞書」「二条家詞書」における数値を加えたものである。

この表（12）からは、以下のような点がみてとれる。

（1）「ひと」「をんな」「をとこ」に関して、「後撰詞書」の語彙と『伊勢物語』の語彙との比の値は、他の作品と比較すると相対的に類似している。

（2）「ひと」「をんな」「をとこ」に関して、「古今詞書」の語彙と『伊勢物語』の語彙との比の値は、（1）には遠く及ばないが、相対的に類似している。

（3）「ひと」に関して、「拾遺詞書」以外の「三代集詞書」の語彙における比の値は、『伊勢物語』の場合を除き、『竹取物語』以下の諸作品よりも大きい。逆に、「二条家詞書」の語彙に関しては、その比の値は小さい。

（4）「をんな」に関して、「三代集詞書」「二条家詞書」の語彙における比の値は、『伊勢物語』の場合を除き、『竹取物語』以下の諸作品よりも大きい。ただし、「三代集詞書」と比較した場合「二条家詞書」の語彙の比の値は小さい。

表 (12)

	ひ　と		をんな		をとこ		官　職		作品別延べ語数
	度　数	期待値	度　数	期待値	度　数	期待値	度　数	期待値	
古　今	116	60	19	8	8	5	1	5	
	1.93		2.38		1.60		0.20		3,917
後　撰	234	107	225	14	110	8	20	8	
	2.19		16.07		13.75		2.50		7,003
拾　遺	76	80	78	10	28	6	28	6	
	0.95		7.80		4.67		4.67		5,203
千　載	51	107	31	14	7	8	59	8	
	0.48		2.21		0.88		7.38		7,008
新勅撰	23	77	25	10	0	6	15	6	
	0.30		2.50		——		2.50		5,051
続後撰	51	76	21	10	6	6	15	6	
	0.67		2.10		1.00		2.50		4,948
竹　取	94	78	19	10	0	6	20	6	
	1.21		1.90		——		3.33		5,119
伊　勢	173	106	135	14	200	8	1	8	
	16.32		9.64		25.00		0.13		6,931
土　左	80	54	8	7	6	4	0	4	
	1.48		1.14		1.50		——		3,496
蜻　蛉	438	343	7	45	7	26	4	26	
	1.28		0.16		0.27		0.15		22,400
枕草子	669	504	48	66	55	38	13	39	
	1.33		0.73		1.45		0.33		32,904
源　氏	3,732	3,182	321	414	65	243	61	245	
	1.17		0.78		0.27		0.25		207,788
紫式部	189	134	9	17	5	10	17	10	
	1.41		0.53		0.50		1.70		8,736
更　級	134	111	5	14	3	8	4	9	
	1.21		0.36		0.38		0.44		7,243
語別使用度数	9,420		1,225		718		725		総使用度数 615,100

（5）「をとこ」に関して、「三代集詞書」の語彙における比の値は、『伊勢物語』の場合を除き、『竹取物語』以下の諸作品よりも大きい。また、「千載詞書」「続後撰詞書」の語彙における比の値は、『伊勢物語』『土左日記』『枕草子』を除き大きい。

（6）官職に関して、「後撰詞書」「拾遺詞書」および「二条家詞書」の語彙における比の値は、『竹取物語』の場合を除き、『伊勢物語』以下の作品より大きい。なお、「千載詞書」「拾遺詞書」の語彙における比の値は、『竹取物語』における比の値よりも大きい。

おおよそ以上のような点が指摘できるが、ここからは、「後撰詞書」と歌物語である『伊勢物語』の語彙の類似性がみてとれる。また、「三代集詞書」と「二条家詞書」を比較した場合、抽象度が高い「ひと」の使用に関して、「二条家詞書」の語彙における比の値が小さい点、「ひと」よりも多少具体性が高い「をんな」「をとこ」においても「二条家詞書」の語彙における比の値が小さい点には注意する必要があろう。この三語の使用からは、三代集と二条家三代集の編纂態度の差がみうけられるからである。つまり、二条家三代集は、三代集に比して、具体性をより重視した「詞書」を付そうとした結果であると思われる。このことは、より具体性が高い官職に関する語の比の値が「二条家詞書」において「三代集詞書」よりも相対的に高い点からも言えよう。

四　おわりに

以上、各和歌集の「詞書」が撰者の編纂方針により相違している点や、「三代集詞書」と「二条家詞書」の差異について、いくつかの点からふれた。

以上述べたようなことからは、「詞書」のどこに魅力があり、面白いのかわからないかもしれない。多分、そのような感想を持つ人が多いだろうな、と思いつつ「詞書」について話した。雅なものの代表とも考えられる和歌の世界にも、歌風をめぐる争いがあり、もっと人間的な派閥争い（誰が撰者になるかなど）があったことも撰歌された和歌とともに「詞書」からもわかる。そう考えると、味気なく思える「詞書」もとても興味深いものになると思う。

［注］

（1）『和歌大辞典』（一九八六）の「応制」の項（橋本不美男氏執筆）に、

　勅命に従って詩歌を詠進すること。…

とある。『宝治百首』などがその代表的作品であり、同書の『宝治百首』の項（家郷隆文氏執筆）では、

　続後撰集選定の準備として後嵯峨院が、当代の主なる歌人四〇人に詠進せしめた宝治二1248年の百首和歌である。…この百首が、勅撰集撰進のための重要な事前準備の和歌行事として意図され、以後の歌壇の先例となる

としている。

（2）『新編国歌大観　CD-ROM版　Ver.2』（二〇〇三年）の「兼輔集

解題」（工藤重矩氏執筆）において『兼輔集』の成立について、
　家集の成立・編者は未詳。自撰の可能性もあるが、他撰でも兼輔没後後撰集以前であろう
とする。

（3）御子左家に関する略系図を示すと、

俊成―定家―為家┬為氏―為世（二条）
　　　　　　　　├為教（京極）
　　　　　　　　└為相（冷泉）

のようになる。この略系図からしても、為家の後世への影響の強さがわかるであろう。

（4）類似度D'の計算方法は、

$$D'ab=\sqrt{Da|b \cdot Db|a}$$

ただし、$Da|b=\sum_{M\in Va\cap Vb} Pa(M)=\frac{1}{Na}\sum_{M\in Va\cap Vb} Fa(M)$

Na：作品aの延べ語数

$\sum_{M\in Va\cap Vb} Pa(M)$：作品aと作品bに共通する見出し語の、作品aにおける使用度数の和

（5）『和歌大辞典』（一九八六）の『正治百首』の項（谷山茂氏執筆）。

（6）内大臣を使用した方がよいかもしれないが、対象とした『竹取物語』から『更級日記』において「内大臣」は『源氏物語』に三例あるのみであるので、「だいじん」を用いた。

（7）期待値は、

作品別延べ語数×語別使用度数／総使用度数

によって計算した。

【本文】

語彙調査や引用に使用した本文は、「古今詞書」は佐伯梅友校注『古今和歌集』（日本古典文学大系八　一九五八年三月、岩波書店）、「後撰詞書」は大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』（一九六五年一二月、大阪女子大学）の本文編、ただし本文の引用は片桐洋一校注『後撰和歌集』（新日本古典文学大系六　一九九〇年四月、岩波書店）、「拾遺詞書」は片桐洋一『拾遺和歌集の研究　伝本・校本篇』（一九七〇年一二月、大学堂書店）の主底本、「後拾遺詞書」は川村晃生校注『後拾遺和歌集』（一九九一年三月、和泉書院）、「金葉詞書」は川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注『金葉和歌集　詞花和歌集』（新日本古典文学大系九　一九八九年九月、岩波書店）、「詞花詞書」は松野陽一校注『詞花和歌集』（一九八八年九月、和泉書院）、「千載詞書」は久保田淳・松野陽一校注『千載和歌集』（一九六九年九月、笠間書院）、「新古今詞書」は久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎校注『新古今和歌集』（日本古典文学大系二八　一九五八年二月、岩波書店）、「新勅撰詞書」は滝澤貞夫編『新勅撰集総索引』（一九八二年一〇月、明治書院）の底本、「続後撰詞書」「続古今詞書」、『兼輔集』『寛平御時后宮歌合』『寛平御時菊合』『正治初度百首』『正治五度百首』の「詞書」は『新編国歌大観　CD-ROM版　Ver.2』（二〇〇三年　角川書店）所収本に、それぞれよる。引用の後の（　）内の数字は、引用本文の歌番号を、歌番号の前の「古今」等は当該例のある「詞書」を示す。傍線筆者。なお、左注の場合は歌番号の後に示す。また、引用に当たって、漢字の字体は現行のものに改めた。以下、同様。なお、『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』等の諸作品における度数に関しては『日本古典対照分類語彙表』（二〇一四）における数値を用いた。

【引用・参考文献】

今井明（二〇〇〇）「続後撰和歌集に見る『新古今時代』―その撰歌と歌壇像―」『香椎潟』四六号
犬養廉ほか編『和歌大辞典』（一九八六）明治書院

大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』（一九九七）明治書院。
久曽神昇・樋口芳麻呂（一九六一）『新勅撰和歌集』（岩波文庫　岩波書店）解題。
国語学会編『国語学大辞典』（一九八〇）東京堂出版。
小久保崇明（二〇〇六）「八代集に於ける『隠る』『失す』『亡くなる』について」『桜文論叢』六五巻。
佐佐木信綱編『日本歌学大系　第二巻』（『古来風体抄（初撰本）』（一九七二）風間書房。
『新編国歌大観　第一巻』（一九八三）角川書店。
『新編国歌大観　CD-ROM 版　Ver.2』（二〇〇三年）角川書店。
西端幸雄（一九九四）「語彙史の立場から見た『拾遺和歌集』―使用語句の性格を統計的に見る―」『国語語彙史の研究　十四』和泉書院。
水谷静夫（一九八二）『数理言語学』培風館、ほか。
宮島達夫ほか編『日本古典対照分類語彙表』（二〇一四）笠間書院。
若林俊英（一九九六）『「詞書」の語彙―三代集を中心に―』城西大学学術研究叢書11。
若林俊英（二〇〇八）『詞書の語彙論』笠間書院。
若林俊英（二〇一四）「三代集と二条家三代集の「詞書」の語彙」『湘南文学』第四九号。

［付記］

本稿は語学教育センター主催の国際教養講座で話した内容をもとに筆を起こしたものである。教養講座という性格上、内容的には初心者対象のものとなっている。また、多くは若林俊英（一九九六）および同（二〇〇八）で既にふれたものであるため、新見に乏しいものとなっている点、了解願いたい。